公益社団法人千葉県隊友会　令和5年3月号（2023.3.31）

館山支部だより　Vol.115

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村　巌
〒294-0032 館山市笠名1357
℡ 0470-22-0230

ケシ科　カルフォルニアポピー
＜３月中旬 拙宅の庭先にて＞

公的な情報によればコロナ感染者数も全国的に間違いなく減少（激減）しており、マスク着用も個人の判断に任され、法的にも第5類（インフル並）扱いに移行が予定されるなど、完全終息に向けて社会生活も徐々に平常に戻りつつあると言えましょう。 自衛隊大規模接種会場（東京、大阪）の閉所式がこの度行われましたが、我々の目に付かぬところでは、各方面の地道な努力が営々として続けられてきたのです。 誠にご苦労様なことです。

＜支部長＞

支部の活動概要

≪2・3月の活動実績≫

2 .27(月)　県隊友会部隊研修（陸自木更津駐屯地）
3.　2(木)　館山市長表敬（市役所、日向顧問・支部長）
3 .11(土)　県隊友会後期支部長会議（千葉市民会館）
4 . 1(土)　年度末支部役員会(コミセン)

≪4・5月活動予定≫

4.19(水)　令和5年度千葉県隊友会通常総会
（千葉市内ｻﾝｶﾞｰﾃﾞﾝﾎﾃﾙ）
5.20(土)　令和5年度館山支部総会等行事
（館空会との合同行事、夕日海岸昇鶴）
5. 27(土)　5月支部役員会（コミセン）

令和５年度館山支部総会等行事のご案内　5.20(土)夕日海岸昇鶴

コロナ感染拡大防止の見地から長い間自粛しておりました館空会・隊友会館山支部合同の総会等行事を開催することになりました。 会活動の切り替えの時期であり、両会にとって多くの会員が一堂に会して相互に交流を深め合う上で絶好の機会でもあります。一人でも多くの皆さんの参加をお待ちしております。
なお、合同懇親会には第21航空群司令はじめ各隊司令、隊員代表の皆さんの参加が予定されております。

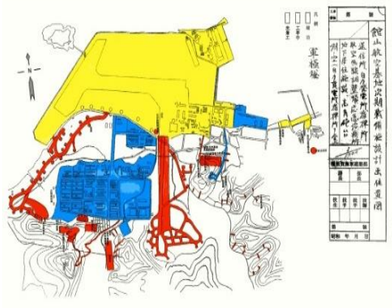
＜支部事務局＞

≪総会等行事のスケジュール≫
期　日：5月20日（土）
場　所：夕日海岸昇鶴　℡23-8111(代)
旧称「たてやま夕日海岸ホテル」
懇親会会費；6、000円

＜行事時程表＞
15:45～　受付開始
16:15～17:00　館空会総会
17:05～17:45　隊友会館山支部総会
18:00～19:45　両会合同懇親会
※ 出欠返信期限：4月21（金）までに投函
送迎便については別途、参加希望者に連絡することにします。
なお、館空会に所属する会員は、別途、館空会から出される案内に基づいて出欠の返信をして下さい。　＜支部事務局＞

＜館山海軍航空基地
次期戦備施設計画位置図＞
（防衛研究所戦史部保管資料）

縮小コピーのため判読はできないが、イメージ的に眺めてもらいたい。
なお、着色は筆者の推測で施したもの。
＜黄＞開戦前の基地（施設）の状態
＜青＞開戦直後（S17）に着工したもの
＜赤＞戦争末期（S19）に着工したもの
＜筆者注＞



レクイエム

2022.11.3 梅本克之会員ご逝去
（海、享年88歳）

昨年11月初めにお亡くなりになっておりました。
隊友会会員として長年のご理解ご協力有難うございました。
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り致します。

＜会員一同＞

部隊研修ミニレポート　2023. 2. 27（月）陸自木更津駐屯地

コロナ禍でしばらく途絶えておりましたが、令和4年度県隊友会企画の部隊研修が特別会員有志を含め70名の会員が参加して行われました。 館山支部から参加した高田裕章・竹林穣両会員から寄せられた研修所見等をもとに、概略（特徴的な事項に絞り）を紹介することにします。

*陸自・木更津駐屯地*は、旧海軍の木更津航空基地の跡地に、空自から引き継いで昭和43年（1968）に開設された基地です。
東京ドーム45個分に相当する敷地には、空自の大型輸送機C－130が楽に離発着できる１800m×45mの滑走路を備え、回転翼を主体とする航空機約70機が配備され、1000名余の隊員が勤務しているということです。
木更津が陸自最大の航空部隊と言われる所以は、輸送ヘリの集中運用による関東地区航空防災の拠点としての任務に加えて2018年に創設された防衛大臣直轄の「陸上総隊」の（水陸機動団や空挺団を支える）任務にあると言えましょうが、これ以上はややこしく？なるので割愛することにします。

研修は、2グループに別れて基地資料館、格納庫・航空機見学等2時間余でしたが、最大の関心事は新鋭機のV-22 オズプレイと言えましょう。いろいろと話題の多いオズプレイで、現在、木更津には暫定的な配備ということですが、まじかに〝実物”に接し、運用・整備に携わる搭乗員等からつぶさに話を聞くことができたことなど、実地研修ならではの有意義な体験でした。
新鋭機の配備、増勢とともに直轄部隊としての任務を与えられるなど、隊員にも勤務に対する誇り・意気込みを見ることができました。一方で、最近の政治的な機微も絡んだ防衛力の飛躍的な増強計画が、心なしか 隊員に今後の見通しを立てる上での〝戸惑い”を与えているような印象を受けました。

*余談*ですが、格納庫で航空機の説明が始まる矢先のこと、一見ギャル風の数名の女性が見学者を前に突然ダンスを始めたのです。特別会員の若い女性たちで事前に申し入れがあったのか知る由もありませんが、一同唖然とする中でのSNSを通じた自己顕示・パフォーマンスは、場違いと言うか何とも釈然としない印象を受けました。
もう一件、広報隊員のブリーフィング最中に会員の携帯に電話が入り、大きな声で長話が続いたため説明が中断されるという一幕がありました。以前もどこかでありましたが公の場での耳障りな私語・雑談など、隊員たちのﾋﾝｼｭｸを買い OBとしての品位を落すような言動は、今後のためにも厳に慎むべきことだと思います。

≪ﾚﾎﾟｰﾄ・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　川 村≫

＜格納中のオズプレイを背景に＞（県隊友会研修担当理事役提供）

続 旧軍文書・記録資料の欠落と史実の探究について

（前号から続く）　前号で戦時中の館山航空基地、館山航空隊の残された公文書・記録資料は皆無に近いことを述べた。
館山航空基地の周辺には今でも沢山の「戦時構築物」が残っている。今では民家の敷地の中とか雑草・灌木に遮られ、目にすることができるのは市が管理する赤山地下壕と掩体壕ぐらいで、その他はその存在すら人々の脳裏から薄らぎつつある。
数年前、本稿で「海軍築城（地下壕、掩体壕など）」について解説したことがある。戦時中の構築物の多くは海軍築城と呼ばれるが、記録資料が無いためそれらの真相実態が分からないものが多い。今回はこれらの手掛かりとなる資料を挙げ、その見方・読み方について述べる。

事例２

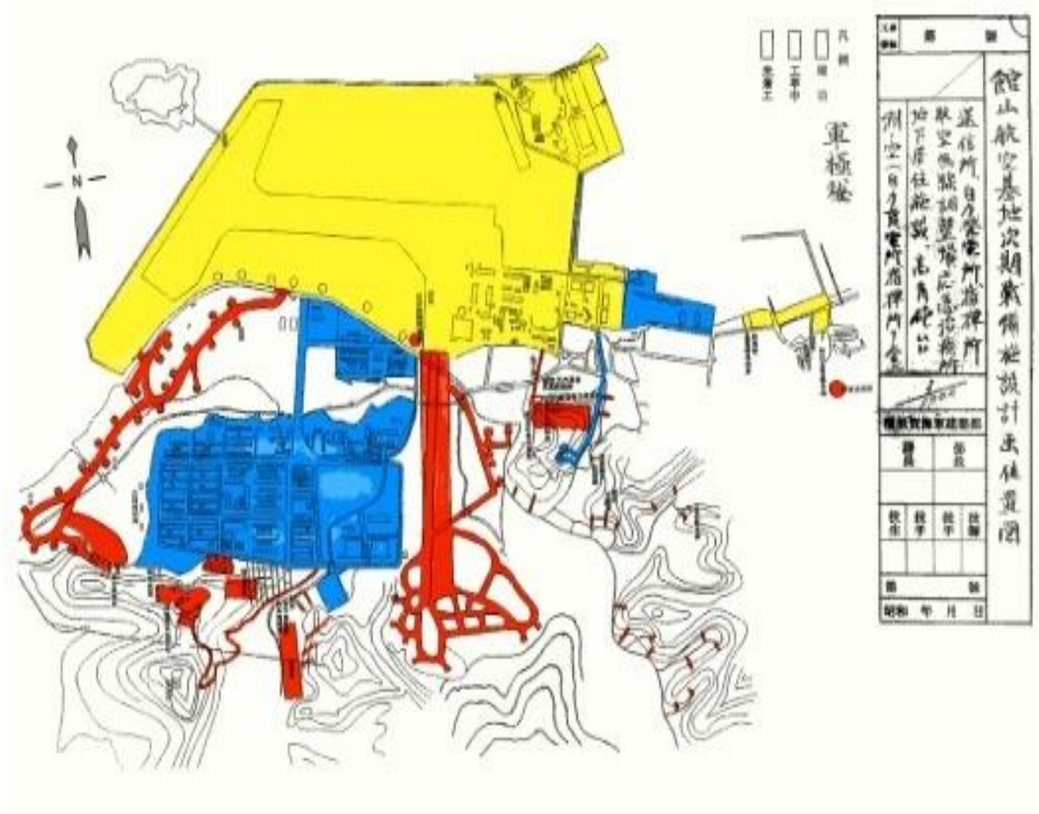
左に掲載した「館山航空基地次期戦備施設計画位置図」は、（館山航空隊が作成した資料ではないが）横須賀海軍建築部が作成した、戦時中の館山基地施設の全体像を類推することのできる現存する極めて希少な資料である。
惜しむらくは、「作成の時期が不明」と言うことである。 図の施設が「既に建設されたものなのか、目下工事中のものか、今後の計画なのか」の区別がまったく不明であり、このままでは史料価値も乏しい。
ここで、昭和18年8月の帝国議会で可決された「海軍建築部令の改定」に着目してみよう。 これは海軍施設関係者の悲願とも言うべき一大事業であり、難局を乗り切る上で施設予算（金、資材、マンパワー）の獲得には建築部令の改定が不可欠であった。 建築部令の改定によって海軍が（それまで手を付けたことが無かった）「築城施設」に着手することが認められたのである。
実は（後が先になった感があるが）この施設計画図には、「横須賀海軍建築部」の名称が作成部門欄に記されている。 前述の建築部令の改定によって建築部が施設部に改称されている。このことから図面はS18．8以前に作成されたものであり、建築部令改定のための重要な根拠資料として準備されたものと考えられる。とは言え「建築部令の改定」の事実を知らなければ分からないことであるが・・。

法令の改正によって、建築部門の大々的な組織編成替に始まり、施設関係要員の増員・養成、建築工法・器材の開発から講習、マニアル類の作成等々、諸々の作業が一斉に始められたが、決して短期間で達成できるような簡単な作業では無かった。
これらの諸準備がおおむね整い、本格的な築城工事が着手されたのは昭和19年に入ってからと考えるのが順当なところであろう。
館山には、*「赤山地下壕は、日米開戦前から海軍の専門工作部隊の手で秘かに工事が進められていた」*と頑なに思い込み、強調する名士がいるようであるが、愚（ヤボ）の骨頂と言うべきであろう。 仮に、前述の施設計画図や建築部令の改定のことを知らなくなくても、それ以前に日本の国防思想からシロウト的に考えても、日本が開戦時点で「地下壕の構築」を必要としたかどうかについて“YES”という答えは出てこないであろう。
「 歴史は作られる」と言われるが、意図・作為的なものに限らず、“無知・浅慮”からくるものが少なくないと思う。

≪自称地域史探索マニア　その38(2/2)≫

＜館山海軍航空基地　（拡大図）

次期戦備施設計画位置図＞
（防衛研究所戦史部保管資料）

前ページを拡大したものである。なお、着色は筆者の推測で施したもの。

＜黄＞開戦前の基地（施設）の状態
＜青＞開戦直後（S17）に着工したもの
＜赤＞戦争末期（S19）に着工したもの
＜筆者注＞